

# 西洋古代史研究とヨーロッパ・アイデンティティ

南川 高志

## はじめに

西洋古代史の研究と本研究会の研究対象であるヨーロッパ・アイデンティティはどのような関係を有するのか。この小論で私が述べようとするのは、このごく基本的な問いに対するささやかな私見である。

ヨーロッパ・アイデンティティ研究のきわめて重要な動機の一つは、20世紀末から急速に進行したヨーロッパ統合の動きのなかで、西洋史学研究の対象である「ヨーロッパ」をいかに捉えるべきか再考する必要が生じたことであり、それはまさに同時代的な性格の問題意識といえる。一方、ヨーロッパの古代の研究は、ここではその研究範囲をギリシア史とローマ史に限定するにしても、今から三千～二千年ほど遡る古い時代を対象とする。しかし、この一見まったく異なるように見える二つの研究分野の間に、私は重要な連関を見出している。この小論では、私が現段階で冒頭の問いについて考えているところ　具体的には今述べた「連関」　を、できる限り簡潔に説明したい。「現段階で」としたのは、この問題に対して私が意識的に考察し始めてから間もないため、今後の研究でその考え方が変わる可能性が少なからずあると思われるからである。また、研究者各人の歴史研究の意義に関する考え方は、その研究者がおかれた社会的な状況、そしてなかんずく研究者自身の人生経験（年齢）によって変わることも充分ありえよう。したがって、小論では、21世紀 COE プログラムに参加しえた好機をとらえて、まもなく五十路を迎えんとする現段階の私見を表明するにとどまる。以下の私の考え方は、もちろん自身のこれまでの研究の歩みから出てきたものであり、また今後の研究の礎ともなる。それゆえ、同じ古代史研究者の方々やヨーロッパ史の異なった時代・分野を専門とするの方々、そして西洋史以外の歴史や考古学を研究するの方々からも御意見を伺えればと願っている。とく

に、研究を新たに切り開いてゆく若い世代の研究者の御批判を伺えれば幸いである。

## 1. わが国における西洋古代史研究の発展

私が専門科目として西洋史学を勉強し始めた1970年代の後半、日本の西洋史学界はいわゆる「戦後史学」の見直しから「社会史」の流行へと移行する時期であった。古代史研究の分野ではこの時期、岩波講座世界歴史第1版の刊行をふまえて、その編集委員を務めた弓削達氏が『地中海世界とローマ帝国』を、太田秀通氏が『東地中海世界』を、ともに1977年に岩波書店から刊行している。これらはいずれもカール・マルクスやマックス・ウェーバーの理論を基礎において、当時のわが国における歴史学研究全般の動向に呼応した作品であり、第二次世界大戦後の日本の歴史学界の特色をはっきりと示していた。これに対して、社会史的な研究がわが国の古代史研究の分野で登場するのは1980年代後半になってからであり、著書として桜井万里子氏の『古代ギリシアの女たち』が1992年に、同『古代ギリシア社会史研究』が1996年に出版され、ローマ史でも本村凌二氏の『薄闇のローマ世界』が1993年に公刊されて、学風の変化がはっきりと示された。

もちろん、日本の西洋古代史研究の動向が如上のような簡単な変化の指摘で総括されるわけではない。20世紀の最後の四半世紀における日本の西洋古代史研究分野の最も重要な特徴は、何よりも実証的な研究が国際的なレベルでなされるようになったことである。本場ヨーロッパでの研究成果を自由に参照できるようになった第二次世界大戦後、日本の西洋古代史研究者は欧米の研究に学ぶだけでなく、それを越えてヨーロッパ人研究者と同等に本格的な史料の吟味をもおこなうようになったが、歴史学界の戦後史学的雰囲気は薄まるのと並行して、わが国の西洋古代史研究はますます実証的に精緻さを増し、古代世界の政治、法制、経済、そして社会の各分野について高度な研究が続々と発表されるようになった。その大多数は日本語で書かれていて、海外で引用されることはごくわずかではあるが、内容的には充分国際的に通用すると私は考えている。史料の利用という点で、貨幣学やパピルス学、そして考古学的な材料の十分な活用はまだ達成できていないものの、古典文学作品や碑

文史料については相当高度な利用がなされるようになったといつてよいであろう。こうした精緻な歴史学研究の発展は、戦後の日本における西洋古典文学や西洋古代哲学の研究の発展と並行しており、それらの文献学的研究によっておおいに助けられてきたことを忘れるべきではない。

実証研究としての歴史学研究の発展は、古代史ばかりでなく他の西洋史学研究の分野についても同じことがいえるであろうが、古代史研究の場合、史料の絶対量が少なく、またルネサンス以来の学問的伝統によって史料の公刊が著しく進んでいるため、早くから文学的史料や碑文史料の利用について、日本の学界は欧米学界にほとんど後れることがなく、研究レベルは相当に高いものがあつた。加えて、近年欧米学界との積極的な交流が急速に進んだことも注目に値する。ヨーロッパ古代史の研究を本場で学ぶことは第二次世界大戦後まもなくから始まっており、数多くの日本人西洋古代史研究者がロンドン大学古典学研究所に在外研究のために滞在したのをはじめ、ドイツやイタリアの大学などに学んだ研究者、大学院生も少なくない。1986年には静岡県裾野市において、数多くの外国人研究者を招へいた国際シンポジウムが、弓削達氏を代表とする組織によって開催され、その後欧文による古代史研究専門誌 *Kodai* が誕生したことも特記に値する。しかし、国際的な研究者の交流が、その頻度と厚みにおいて明らかに変化したのは1990年代の中頃であろうというのが私の実感である。あえて画期をあげるならば、1995年秋のケンブリッジ大学古代史教授（当時）キース・ホブキンズの来日がそれに当たるといえよう（本村凌二東京大学教授の招へい）。これ以降、イギリス人研究者を中心に欧米の研究者が次々と来日して日本人研究者と交流を深めるようになり、これと並行してヨーロッパや米国の大学で本格的に学ぶ日本人の若手研究者や大学院生も急激に増えた。科学研究費の利用による海外調査と外国人研究者招へいが可能となったことも、こうした国際的な研究活動の大きな促進剤となっている。さらには、COEプログラムによって国際的な研究活動の幅が広がり、私自身が主催者となってこの研究会でささやかな国際会議を開催したように、日本で西洋古代史研究の国際会議をしばしば開催することも充分可能になったのである。

ヨーロッパへの留学者が急増し、研究者レベルの交流が盛んになったことに加え、インターネットの利用や電子化されたテキスト、画像の

使用など、研究情報の点でも一層進歩が見られたことは、たいへん喜ばしいことであり、実証研究のレベルは今後さらに高まるであろうと思われる。日本の西洋古代史研究の成果が欧文で発表され、欧米研究者にも読まれるようになれば、とりわけ近年の若手の研究はきわめて高い評価を得られるのではないかと私は楽観的に考えている。しかし、こうした明るい側面も見られる一方で、いささか懸念されることもある。ここ四半世紀の研究の変化は、古代史研究の目的や方法の点で、それ以前とは大きな違いを生み出してしまったように感じられるからである。

## 2. 西洋古代史研究の危機

日本の西洋古代史研究を国際的なレベルへと引き上げる立役者であった村川堅太郎氏は、自身が「精密機械」と呼ばれるほど精緻な実証研究で国際的に有名な学者であったにもかかわらず、絶筆といってよい随筆の中で、近年の若手研究者の精緻を極めた研究の増加に対して批判的な意見を書いている。村川氏は、四半世紀も昔にアーノルド・モミリアーノが流行の「社会史」の研究が精緻を極めるあまり、顕微鏡的分析に陥っている現況に危惧を表明したことを改めて引き合いに出し、近年の古典古代史研究が最新の研究文献に広く目を配る点では欧米の学者以上であることを評価しながらも、外国の最新の著書、論文を追いかけ、追い越せという傾向が顕著である点が気にかかる」と述べる。そして、一生の研究態度として、若手研究者に次の2点を提案している。その一は、「学問は古代であっても、驚くべき変化の渦中にある現実の世界を注視して、ここに来るまでの人間の歴史の全体像を考えること。論文は古い時代のせまい事柄についてにしても、世界史の全体を絶えず念頭に置き、人間性についての高次元の価値判断をもつこと。」その二は、「地球の外に出て人工衛星の上から地球を眺めて、自分の研究対象を位置づけること。具体的には、日本人として身近な漢字文化圏の歴史、文化との比較という視点をとること」である。後者について村川氏はさらに次のように述べている。「日本の歴史家は幸か不幸か古典古代とは180度ちがう社会の伝統を背負っている。この比較の観点に立てば、片カナの一字も、漢字の一字も読めぬ欧米の古代史家の気づかぬことが発見されうると私は考えている。」

この村川氏の提案のもととなった精緻を極めた論文の洪水現象は、藤縄謙三氏にとってはもっと深刻な問題であった。村川氏の教え子の世代に属する藤縄氏は、その独自の学風によって古代ギリシア史研究の領域で膨大な成果を上げたことは改めていうまでもないが、その藤縄氏が自身の京都大学定年退官を記念して編んだ共同論集において、きわめて悲観的な見方を明らかにしている。すなわち、藤縄氏によれば、古典ギリシアの研究は第二次世界大戦後危機的な状態になった。しかし、その危機の原因は実用重視、例えば古典語の教育ではなく社会人として直接的に役立つ専門科目を重視することなど、外部条件のみにあるのではない。現代文明における生産過剰にも似て、研究成果の蓄積が膨大になり過ぎたために、「教養」の範囲を大きく超えてしまった状況にこそ問題がある。氏はそのようにいうのである。そして、このような危機は古典語教育を充実するだけで解決できる状況ではなく、根本的には、個々の研究者の価値判断や創意によって道を切り開くより道はないであろう、とペシミスティックに稿を閉じている。

藤縄氏の見解はきわめて逆説的である。古代ギリシア史は、研究が進展したために、本来の研究意義を失っていったということになるからである。この見解は、日本だけでなく、欧米の研究も含め、すべての古代ギリシア史研究に関して述べられたものであるが、私のような古代ギリシア史を専門とはしない者でも、第二次世界大戦後の日本における古代ギリシア史研究の華やかな発展ぶり、とくに古典文学作品ではなく碑文や貨幣に史料の重点を移した近年の精緻な研究を想起すれば、藤縄氏の指摘は容易に理解できよう。同時に、独創的と見られる藤縄氏の研究の意義やその重大さが改めて認識できるのである。

精緻な実証研究の進展が、研究そのものの持つ意義を逆に失わせてしまっているという指摘は、何も古代ギリシア史にのみ該当するだけでなく、西洋史学全般にわたってそのようにいえるかもしれない。ただ、「国際的」研究を目指して、使い古されたと考えられがちな文学的史料ではなく、碑文史料や貨幣などに史料を求めひたすら精緻な研究に邁進するようになった古代ギリシア史研究の最前線を見るならば、ことさらにこの点がゆゆしく感じられる。私の専門分野であるローマ史についても、ギリシア史とはその世界史的意義の性格が異なるけれども、研究の実態はほぼ同様である。ヨーロッパでも、例えばハイデルベルク大学の

古代史ゼミナールでは、ゲザ・アルフェルディ名誉教授がテオドル・モムゼン以来の『ラテン碑文集成』を継承発展させ、アンゲロス・カニオティス教授のギリシア語碑文研究とともに、碑文研究や碑文を史料とした歴史研究が華々しく推進されている。しかし、ドイツの大学の古代史部門の重要な目的の一つが中等教育機関であるギムナジウムの教師の養成にあることを考えれば、大学での研究が碑文に偏るのは問題ではないかとの意見を私は耳にしたことがある。いま碑文史料に対してネガティブな評価を紹介したが、個別の専門研究をするに際して、文学的史料とてバラバラに解体して断片的に議論すれば同じことになる。いずれにしても、精緻な研究が徹底的になされるようになれば専門分化が著しくなると、研究者各人の作業は歯車の一つにしかならず、全体像を見失って歴史的な洞察まで個人の研究が至らなくなるおそれがある。村川氏や藤縄氏の懸念は、まさにここにある。われわれはここにおいて、では何のために西洋古代史を研究するのかという、陳腐で、しかし今日の一般聴衆に説得的な解答を示すのは容易でない問題に改めて遭遇することになる。

### 3. 西洋古代史研究の意義とヨーロッパ・アイデンティティ

古代史研究の意義は何かと問われると、私は藤縄謙三氏が若き日に書かれた論文の一節をすぐに想起する。藤縄氏は「古代史研究と考古学の役割」と題された論文の中で、次のように書いている。歴史を何か1本の流れのごときものとして把握するのは、私たち日本人の常に行なうことであるが、必ずしも適当ではない。もし歴史がそのようなものだとなれば、現在の私たちを大きく規定しているのは、直接に先行する近い過去の諸事件であって、現代から遠い過去ほど重要性が少ないことになる。しかし、歴史を1本の川の流れのごときものと見なすのは、あの『方丈記』に見られるような諦観が生み出した歴史像を、あまり反省せずに受け継いでいるに過ぎないのである。もし歴史が人間の努力によって造られ築かれてきたものとなれば、それは決して流れのごときものとは見なされえない。何かに喩えるとすれば、ピラミッドのごとき構築物であって、現在の私たちはその頂点に位置していると考えられる。歴史がもし、このような構築物だとすれば、太古に築かれた礎石も現代の私たちの存

在にとって必須の前提なのであり、上の方に置かれた石塊よりも却って重要なのである。そして、古代史家の固有の任務は、かかる意味での古代の重要性を探り出し、現代人に理解される形に再構成することにある。世の凡庸な古代史家は、近代史や現代史において重要視されているのと同種の問題を古代史の中に見いだし（例えば、第一次大戦前後の同盟関係と類似の国際関係を古典期のギリシアに見出すというように）、それを扱うことによって、古代史家の現代的な存在理由を示そうとする。もちろん、かかる研究も無意味ではないけれども、このような研究態度では古代史家が自らを卑賤な地位に下落させていることになる。古代史の真に重要な意味は、現代人のあまり気づかないところに、ピラミッドの砂に埋もれた礎石のごとき姿で存在しているのであり、古代史家は真に自由で純粋な知性の立場から、それを解明しなければならないであろう。藤縄氏はこのように述べるのである。

私は、藤縄氏がまだ 30 代前半の若さでこうした卓見を適切な比喻とともに示されたことに驚嘆しつつ、あるエッセイにおいてこれを紹介した。また、そのエッセイを受けて文学研究者の中務哲郎氏が、藤縄氏の見解は西洋古典文学研究についても当てはまるものだと言われたこともあった。古代史研究の意義そのものについては、一般論として、またとくに現代史と対比される場合に、この藤縄氏の見解が今日でも十分なものといってよいであろう。しかし、氏が最後に述べているような作業を日々の研究で実践することは容易ではない。少なくとも私のごとき非才な古代史家には至難の業とも思える。

藤縄氏は、近代史や現代史において重視されているのと同種の問題を古代史に見出して研究することを批判された。それは、氏の述べられた文脈についていえば、まことにその通りであろう。しかし、先に紹介した村川氏の提案、すなわち、「学問は古代であっても、驚くべき変化の渦中にある現実の世界を注視して、ここに来るまでの人間の歴史の全体像を考えること。論文は古い時代のせまい事柄についてにしても、世界史の全体を絶えず念頭に置き、人間性についての高次元の価値判断をもつこと」という見解にも見えるように、古代史研究者も古代史と近・現代史との関連を重視しつつ研究することは試みなければならぬ。それは決して古代史家の地位を貶めることにはならないと私は考える。

西洋古代史の研究は、まずルネサンスの時代にその基礎が造られ、そ

して19世紀から今日に続くような本格的な発展が始まった。すなわち、古代史の研究にはヨーロッパの近現代と共に歩んだ長い歴史があるといえる。そして、その長い歴史ゆえに、古代史の研究や築かれた歴史像は、各時代の状況から大きな影響を受けてきた。また、古代史の研究は、中世以降のヨーロッパ史研究と異なり、1国民国家を単位として、いわば各国史的になされているわけではなく、ヨーロッパの各国で共通のものとしてなされてきたが、実際にはそれぞれの国の事情が投影されている。古代史研究は、その研究の伝統そのものがヨーロッパの近現代史を照らし出す鏡になっているといつてよい。

こうした古代史研究の性格と意義は、研究の際に個々の問題についてその学説史・研究史の検討の折に認識されてきた。しかし、個別実証研究が圧倒的多数を占め専門分化が激しい学界状況では、古代史研究の研究史を総体として問題とするような議論をおこなうことは稀であった。近年、オリエンタリズム批判やポスト・モダン、あるいはポスト・コロニアリズムからの刺激によって、ようやくいくつかの局面でこうしたヨーロッパの古代史研究をその時代性ととも批判的に理解しようとする観点の研究が現れるようになってきている。また、上記のような思想・思潮とは離れているものの、ローマ共和政の政治思想上の位置を論じた最近のファーガス・ミラーの著書も、そうした試みの一環として捉えることができるかもしれない。しかし、研究のヨーロッパ的特質を客観的に抽出するのは、ヨーロッパ人研究者よりも、ギリシア・ローマ文化をその基層に持たない世界の研究者、つまりアジアや日本の古代史研究者の方が有利ではないかと私は考えている。先に紹介した村川氏の見解にあるように、日本の歴史家は幸か不幸か古典古代とは180度ちがう社会の伝統を背負っているため、この比較の観点に立てば、片カナの一字も、漢字の一字も読めぬ欧米の古代史家の気づかぬことを発見できるかもしれないのである。

## 結びにかえて

私はいま、今日のイギリスやドイツに相当する地域のローマ時代の実態を研究するとともに、イギリスやドイツというローマ史研究の世界的中心といつてよい国々で自国の古代史やローマ帝国像がいかに研究さ



れ、いかに描かれてきたかを調べている。そして、21世紀の今日にまで及ぶヨーロッパにおける古代ローマの影響をそこに看取するとともに、逆に古代史研究の変遷の中にヨーロッパ独自の性格を見出している。ヨーロッパをヨーロッパたらしめているものがその長い文明の歴史であるとするならば、古代史研究はその古さゆえにヨーロッパの歩みの特質を照らし出す鏡となることができるであろう。その歩みの特質は、今日のヨーロッパ、拡大と統合に向かって変化を続けているヨーロッパの本質を捉えることに繋がる。私が、ヨーロッパ・アイデンティティと古代史研究との「連関」を感じているのはまさにこの点である。

私は、ギリシア・ローマ文化を基層に持たぬ世界に生まれ、教育を受けてきた研究者として、その立場を弱点ではなく利点としながら、ヨーロッパ世界の歴史的歩みを考えようとしている。村川氏の提案された比較の観点に立てればと思っている。しかし、明治生まれの村川氏に対して、第二次世界大戦後10年を経て生まれた私は、村川氏のように比較を有効に活用できる力はないかもしれない。それは、大戦後アメリカを通じて入ってきたヨーロッパ的なものが、私の世代の日本人の中にはたくさん入ってきてしまっているためである。そういう意味では、ヨーロッパ・アイデンティティを研究することは、同時に自分の内なる「ヨーロッパ」と「アジア」を検証することにも繋がるであろう。

古代史研究そのものの主体性を失うことなく、ヨーロッパ人研究者とは異なった観点から古代史研究の対象を眺めること、そしてヨーロッパ人研究者の形成した学説や歴史像が近・現代史の歩みの中でいかに形成され、どのような特質を持っているかを明らかにすること、さらに、それをふまえて今一度古代史研究の場で対象と問題を再考して私見をまとめ、ヨーロッパ人研究者に提示して討論すること、私の当面の目標はそのあたりにおかれることになろう。

#### 註記

以上の本文で述べたような考えに基づいて近年私がおこなってきた研究は、現在のところさしあたり次の3点にまとめられている。参照いただければ幸いである。

単著『海のかなたのローマ帝国 古代ローマとブリテン島』岩波書店、  
2003年5月（英文要約付き）

編著 *Material Culture, Mentality and Historical Identity in the Ancient World. Understanding the Celts, Greeks, Romans and the Modern Europeans*, Kyoto University, Kyoto, 2004

論文「ヨーロッパ統合と古代ローマ帝国」紀平英作編『ヨーロッパ統合の理念と軌跡』京都大学学術出版会、2004年近刊所収

なお、本文中で言及した文献は以下の通り。

弓削 達『地中海世界とローマ帝国』岩波書店、1977年

太田秀通『東地中海世界』岩波書店、1977年

桜井万里子『古代ギリシアの女たち』中央公論社、1992年

『古代ギリシア社会史研究』岩波書店、1996年

本村凌二『薄闇のローマ世界』東京大学出版会、1993年

村川堅太郎「地球的視角の必要」『学術月報』（日本学術振興会）45-1、1992年1月所収

藤縄謙三「近代におけるギリシア文化の復興」同編『ギリシア文化の遺産』南窓社、1993年所収

「古代史研究と考古学の役割」田中美知太郎編『歴史理論と歴史哲学』人文書院、1963年所収

中務哲郎「日の下に新しいものなし」同『饗宴のはじまり』岩波書店、2003年所収

南川高志「西洋古代史研究と21世紀」『西洋古典叢書 月報』（京都大学学術出版会）20、2000年所収

Géza Alföldy, *Die Alte Geschichte in Heidelberg*, in : J. Miethke (hrsg.), *Geschichte in Heidelberg*, Berlin u. Heidelberg, 1992

Fergus Millar, *The Roman Republic in Political Thought*, Hanover & London, 2002

（京都大学大学院文学研究科教授）